

第 6 回三重大学教育学部外部結果

三重県教育委員会研修分野総括室長 山 口 典 郎

外部評価委員会の前に、授業公開を参観した。

そこでは、担当の教員により、学生に関心を持たせるため、資料を提供したり参加型の授業や、小人数でのきめ細かい指導での授業が展開されていた。学生も勝手なことをするものもなく、学び舎としての様相を呈していた。

外部評価委員会で、学部の概要説明を受けた。

その 1 つに、教育学部の改組があった。

今後、教員の大幅な定年退職者が見込まれ、教員需要が急増することが予想される等の理由から、情報教育過程をはじめとした定員を減じて、学校教育教員養成課程の定員を増やす案が出された。

それは、時期を得た提案であり、各教科の定員の増も採用の動きを読んで提案されていた。

2 点目として、中期目標・計画における学部の教育目標の説明を受けた。

『「感じる力」「考える力」「生きる力」を基礎に、専門性、広い視野、教育実践力を持つ教員や教育関連分野で活躍できる人材を養成する。』は、現在、学生はもとより学校現場の教職員にも必要なことであると感じた。

座談会のなかでも、「教職員の精神的な弱さがある。」ということに議論が集中したことで、大学が考えている教育実地研究やボランティア等は、学生に体験させることにより子どもたちと接することの重要性や、困難を乗り越える逞しさを身につけるという点から、有効性があると言える。

また、FD 委員会は、教員が学生と語り合ったり、共に催しを開くことにより、学生の意見を取り入れた大学運営をすることができるという点で、今後の発展が楽しみなものである。学生たちの思いを知り、大学運営の改善に生かすことができるならば、素晴らしい大学になりうるであろう。

次に、連携のことである。

津市との、学力やボランティアを中心とした連携から、更に四日市市や、三重県教育委員会との連携に広がりを見せようとしている。

これらは、三重県における三重大学の存在を再認識させることに繋がる。

また、中国をはじめとした国際的な連携は、世界の教育の流れを掴み、先進的な教育の導入への糸口にできうるものである。

その他に感じたことを挙げる。

三重大学を周知する件である。

ホームページの充実をすることや見やすくすることで、大学の良さを国民や県民にアピールする努力が必要であり、大学の広報誌「X」も広く知ってもらおう努力をすることが大切である。

「中期目標・中期計画及び具体的達成目標並びに平成 17 年度年度計画」は、PDCA サイクルで更に良いものにまとめあげるようにしていただきたい。

ただ、授業評価の実施が半数強となっており、更に、教員全体のものになるように期待していきたい。

完全学校週5日制で学校での各教科の時間数が減となり、特に中学校教員の複数免許の必要性が出てきている。

しかし、学生が、なんでもかんでも取得するのではなく、意欲を感じて教えることができる教科に限定させるように指導する必要がある。

各三重大学教育学部附属の学校園の教育活動は、県下の学校や教職員の教育活動の手本となることが多く、各学校や教職員も期待しているところであり、継続した研究を進めていただきたい。

三重大学教育学部外部評価に加わって

津市教育委員会教育長 田 中 彌

昨年度に続き、外部評価委員を引き受け、委員会に参加したので、些か私見を述べさせていただきます。

1. 授業の改善

昨年はすべての授業が公開され、“いつでもどうぞ”という授業参観であったが、結局は4人の先生の授業しか見ることが出来なかったので、今年是用意された8つの授業を駆け足で参観させていただいた。

いずれも専門科目の授業だけに、少人数のクラスが多く、熱心に授業に参加している学生の姿が印象的だった。一方的な講義形式は殆ど無く、プリントやビデオ、パワーポイントを使って学生に考えさせ、意見や質問を引き出そうとする先生方の授業への取組は、大変効果的なものだった。また、今年は演習、創作といった授業も参観したが、その中でも学生個々の考え、工夫が問われる意見交換や論議の場も作られ、教員を目指す学生にとって自分を磨く良い機会となっていた。

言うまでもなく、教育の場では授業が最も重要であり、授業を通して多くのことが培われていく。次の教育界を担う人々が創意工夫に満ちた授業を受け、切磋琢磨し合って向上することは大切であり、やがては良い教師になることに繋がると思った。

2. 学部改革の推進

教育学部の改組計画についての説明を受けたが、その必要性と事由の第一に、今回の改組案は「実践的指導力」を身に付けた人材を育成し、学校教育分野及び教育関係分野に輩出を図ることが第一義の課題としている、とあった。平成18年度の入学定員は増員とはならなかったが、学校教育教員養成課程の定員は大幅に増やされ、今後の教員需要に応じるものであることを知り、率直に嬉しく思った。

教育学部は、小中学校教員養成を主な目的にしているものであり、今後も積極的な養成を図る努力を続けることにより、教員採用率の向上とともに教員養成系大学としての役割を果たして欲しいものである。

また、学生の教育活動支援委員会の活動や教育実地研究についての説明があったが、いずれも時宜に合うものであり、今後さらに充実を図っていただきたいものである。特に実地研究は、学生が科学教室等を開いて実際に子どもと触れ合う、また学校へ出かけて教師や子どもと触れ合うなど、実地体験を中心とした授業科目であるとのことであったが、目的意識を持って入学した学生が1年次から順次継続的に履修し、教育実習に繋げていけば、私の願う強い教師が育っていくものと確信している。

3 . 教委、学校との連携

教育学部と津市教育委員会では、昨年度相互の有機的な連携のもと、教員の資質向上施策を総合的・体系的に推進するため、連携・協力に関する協定を結んだ。その意義は大きく、その後の津市の教育改革の推進に寄与し、学校の活発化を前進させている。一方、教委職員や小中学校教員が大学の授業に参画したり、大学の先生や学生が学校で実践研究を行ったりする機会も増えている。来年度は上記の教育実地研究が本格的に実施されるとのこと、その成果を大いに期待している。

また、四日市市教育委員会との連携の話が進められているとか、誠に結構なことで、教育学部を中心に三重大学が県下の学校の強力なサポーターとなっていいただきたい。さらには、教職大学院・専門職大学院開設に向けての準備を急がれ、その早期実現を図っていただきたいものと強く願っている。

4 . 広報活動の充実

先日、近鉄津駅で三重大学情報誌を見つけ、名古屋までの車中で楽しく読ませていただいた。また今年は、津文化協会の主催する文化講演会で、何人かの三重大学の先生の専門分野のお話を興味深く聴かせてもらっている。

教育学部のホームページや情報誌など、高校生に対する入試情報だけでなく、学部改革の内容や推進事業等の情報発信を行い、県下の他教委や学校との連携にも繋いでいっていただきたい。

最後に、学内の先生や学生への広報も忘れず、新しい教育への意識を高めていっていただくことをお願いしてペンをおく。

三重大学教育学部外部評価委員評価結果

四日市市教育委員会教育長 川 北 欣 哉

国立大学が法人化され大学内外の環境が厳しさを増す中、自己点検・自己評価に加え、外部評価も実施されて大学経営に取り組みられていることに敬意を表します。

まず、授業を拝見し感じたことを述べる。マンモス私立大学で学んだ経験から、教育学部の授業は非常に恵まれた環境にあり羨ましくも感じた。

少人数教育であるが、内容は到底理解できないが見せていただいた授業の半分以上が10人以下、教授と直に話れる密度の濃いものであった。学習支援論や情報数理解析なども、受講生が多いといっても80人程度、私学の比ではない。教授、学生とも意欲的な態度であった。今後も、より効果的な教育方法の充実を期待する。

学生は余りにも恵まれ手取り足取りになってないか、この中で逞しさは育つのか、少々不安も感じたところである。外部評価委員会の席でも述べたが、大変難しい問題ではあるが「生きる力」を超えた「生き抜く力」を学生時代に身に付ける授業を心がけていただきたい。精神的に逞しい潰れない人間、それが今の時代の教師に求められている。

次に、長く一般行政に携わってきたが、公務員の経営感覚の甘さと厳しさの欠如を常に指摘された。教育行政の分野に入り、教育界も公務員同様の感覚であることを痛感している。

大学の厳しい競争時代の中で法人化され、一層の経営手腕が求められる。教育学部という組織は明確な目標を持って常に経営を改善し、活性化を図りながら目標を達成していかなければならない。PDCAの手法は既に学校現場でも取り入れられているが、マネジメントの経験の少ない校長は消極的な面もあり模索中である。現在の教育学部の取り組みは大きく評価されるが、経営に一層の工夫を行い、定められた具体的な目標の達成に向けて厳しく大学経営に取り組みたい。

次に地域連携の必要性から、今後四日市市教育委員会との連携の考えをお聞きした。本市には教育学部を要した大学はない。必要に応じ教育学部の教授の指導をお願いしているが、組織としての協力関係にない。大学が地域に果たす役割は大きい。本市には工業都市としての技術者が多くいる。公害を克服してきた貴重な経験もある。また、米国・中国との連携も行い、活発に交流している。教育学部と四日市市教育委員会が連携の関係を築き上げれば、三重県や津市とは異なった協力関係が生まれ、お互いに大きなメリットを得る可能性がある。どのような連携が出来るか協議を願いたいし、推進していただきたい。

情報公開の手段は多くあるが、今ではインターネットの活用が当然の手段である。特に、ホームページの充実が期待される。教育学部は幅広い分野の専門家と学生を要している強みがある。これを活用して、見やすく知りたい情報が何時でも入手できるホームページへと充実されたい。特に目指す姿、具体的目標、計画、課題、展望、評価など、概要だけでも公開すべきと思われる。

いずれにしても子どもの教育は、究極的には直接教える教師の指導力にかかっている。その教師を育てる教育学部の責務は重大である。三重大X広報誌にこのような記述があった。「教師は五者（学者、医者、易者、役者、芸者）でなければならない」教師としての専門力量はきわめて総合的なものであり、科学的な知と同時に実践知を必要とすると。

教師が子ども、保護者、社会から、真に信頼され尊敬される存在になって欲しい。

五者たる資質を大学時代に常に意識させる教育も願わざるを得ない。

教 育 学 部 外 部 評 価

三重県高等学校長協会会長 水 越 利 幸

今回、三重大学教育学部の「外部評価」に参加し、貴重な体験をさせていただきました。今後、高等学校の運営に生かしたいと思っています。以下の点について、私の感想と見解を述べたいと思います。

三重大学教育学部のビジョンについて

三重大学のビジョンとして「感じる力」「考える力」「生きる力」がみなぎり、地域に根ざし、また国際的に活躍できる人材の育成を目標にしており、その基盤となる「コミュニケーション力」を培うこととして、種々お取り組まれていることを評価いたします。これらの力を客観的に診断する方法や教育効果を上げるべく経年的な検証が必要であろうと考えます。これらの調査(三重大学生の「4つの力」)が蓄積され、この4つの力を発揮させるための方策を構築していくことが、今後の課題と思います。

教育学部の授業内容について

公開授業については、8講義を駆け足で見せていただきましたが、50～70人ほどの大教室での授業、6～8人ほどの少人数の実習を取り入れた授業と、学生はどれも真剣に受講していました。特に、「造形メディア基礎演習」、「小学校専門音楽C2」、「技術と生活C」では、参加型ものづくりの授業で興味深く見学いたしました。

これらのことは、教育実践力をもつ教員の育成と各専門分野の研究能力を培うことにつながった授業がなされているものと思われます。また、豊かな感性、気づき、強いモチベーションで学びの喜びが育成されるカリキュラムの提供やチュートリアル教育の導入、教育実地研究として子供とふれ合う科学教室、現場の教師とふれ合う体験(生徒指導に関する内容等)などの実践的な学習が取り入れられていることは、教員になろうとする人材にとって意義あるものと考えます。

要望としては、今日のアジア諸国との国際化の進展に伴って、若者たちに明治以降の歴史をきちんと教授願いたいと思います。

地域との連携や地域社会について

地域との連携や地域社会への還元について、伊勢湾文化資料、紀伊半島地域文化遺産や特性などの研究、また地震防災研究など大いに期待いたします。特に、津市や四日市市に知的支援センターの開設など、当大学が県の大学の知的支援の中心的役割を担われようとしていることは、地域社会と大学・学部がより身近な関係となり、信頼感を増すことと考えます。

一方、ベンチャー企業への支援、地域産業への学術的知的成果や特許出願の数、世界に誇

れる研究拠点形成のためのプロジェクトの立ち上げなど、地域社会に貢献していただきたいものと考えます。

学校との連携について

津市の小中学校との連携や、高等学校のSSH事業に積極的に対応していただいていることや、また高大連携で県内高校生が三重大学の各学部のキャンパスでの講座を体験することは当大学の魅力と関心を一層高めることになると期待し、ひいては志願者の増加につながるものと思います。今後も高等学校協会と密接な連携を図っていただき、この講座が大学入学後の単位としての可能性についても検討されることを望みます。

国際交流について

天津師範大学、江蘇大学、チェンマイ大学、タスマニア大学等々との交流、加えてノースカロライナ大学との遠隔事業の実施など、学生が外国語研修や異文化理解、国際感覚を身につけられるような方策がなされていることは、グローバル化されていく今日にとって必要不可欠なものとなっています。今後もそれらの対応が一層望まれます。

FD委員会について

教育学部の学生の気質として、外部からは、おとなしく優秀な学生とのイメージをいただいていると思いますが、元気さや積極性が欲しいとも感じています。今後、教員として活躍していくためには、家庭、地域社会の方々との接触や地域の種々の体験をとおして教員としての資質を磨いていく必要があります。このことから、FD委員会で学生と教員がともに語る会やFD学習会で、大学の授業評価ばかりでなく、教員としての「心の有様」や「心がけ」等を話し合うなど、力強く、情熱ある教育者としての職業観の育成を図っていただければと思います。また、保護者と大学側との懇談会を開催し、今後の大学の施策に反映されることもあってもいいのではと考えます。そして、学部のよさを十分アピールしていただきたいと思いません。

その他

学部内の美化運動やボランティア活動、あいさつ等のマナー教育など、学生の意識を高めることも大切だと考えます。なお、教員となれば何らかの部活動を担当しなければなりません。大学での部活動は学生自治が主体となっているものと思われませんが、大学として部活動にどのように対応していくかも検討する必要があると考えます。

失礼ながら、勝手なことを申し上げました。今後、三重大学教育学部の益々の発展を期待して報告とさせていただきます。

評価項目「教員養成の在り方 - 教育内容を軸として - 」

津市立養正小学校長 坪 井 守

【公開授業を参観して】

学生の参画度合いの視点から授業を拝見させていただきましたが、特に印象に残った授業は、森脇健夫教員の「学習支援論」、上山浩教員の「造形メディア基礎演習」、高瀬瑛子教員の「小学校専門音楽C2」でした。

「学習支援論」の授業では、指導者の学生に伝えたいメッセージというものが授業を参観した者にも感じられ、学生も講義によく耳を傾けていました。また、「造形メディア基礎演習」の授業では、パソコンを駆使してデザインする授業でしたが、具体的な活動を通しての授業は、学生にとって興味・関心の持てるものであったように思います。「小学校専門音楽C2」の授業では、少人数の中、議論が活発に行われており、指導者のコメントも適切であったと思います。

このように、より多くの学生が参画出来るよう工夫された授業、また具体的な体験を取り入れた授業では、学生の表情に満足感が表れているように感じられました。こうした授業に加え、小中及び高校での児童生徒の実態等を盛り込んだ授業は、今後も学生がより求めてくると思います。

【教員養成の在り方について】

1. 小中及び高校の子どもの実態を具体的に掴む

子どもの連続した成長を考えると、今日の学校教育では、幼小の連携、小中の連携、中高の連携、高大の連携はますます重要となってきています。こうした各種学校間の連携が進む中、大学と教育委員会と学校等が協働しながら、保幼・小中・高・大の全ての幼児・児童生徒・学生を、次代を担う地域の大切な人材として教育していく必要があると思います。

それは、小中及び高校で育った子ども達は、やがて大学へ進学するからです。大学として、将来入学してくるであろう子ども達の実態を具体的に掴んでおくことは、大学の教育内容が学生にとってより有効なものとなる上で、大切なことだと思えます。

2. 今日的な学校教育の課題をテーマとした授業に努める

今日の学校教育の課題として、経営品質の取組、不審者・地震等への危機管理、保護者や地域住民とのコミュニケーション力の向上等が挙げられ、こうした新しい課題を授業にも積極的に取り入れるとより効果的だと思えます。

3. 学校教育現場等の教員による出張授業をより多く実施する

今日の教育学部生の教員志望のモチベーションを高め、そして深めるためには、大学においてより専門的な知識を獲得することは勿論ですが、それにも増して教育哲学等を十分に身

に付け、より人間性を高める必要があると思います。

また、学校現場等の教員による出張授業を定期的を実施し、学校現場の具体的な実態もまじえた授業を行うことで、より学生のニーズに応じていってはどうでしょうか。

4．大学生生活の隙間を埋めるための、学校等でのボランティア活動に参加させる

教育実習以外にも学生が積極的に学校でのボランティア活動を行うとともに、学生を預かる学校等においては、大学生生活と就職までの隙間を埋める役割を担い、学生の就職までのケア（相談、指導）を行わなければならないと思います。

5．今日の指導力不足教員の実情から教員養成の課題を分析してみる

文部科学省の指導力不足教員に関する 2004 年度の調査結果によると、「適切な指導ができないなどの理由で“指導力不足”と認定された公立小中高校の教員は、前年度比 85 人増の 566 人」と発表しています。

これをさらに詳しく見てみると、学校種では、小学校教員 49%・中学校教員 28%、性別では、男性教員 72%・女性教員 28%です。経験年数では、40 歳代 50%・50 歳代 34%であり、在職年数では、20 年以上が 61%・10～20 年未満が 31%です。

こうして見てみますと、教員に求められる資質は、経験年数というよりは情熱・新鮮さ・旺盛な研究心・人間的魅力といった要素が重要であると考えられます。こうした調査結果も十分に踏まえた上で、大学での教員養成を考えていく必要もあると思います。

6．「学校での研修の在り方」と「大学での教員養成の在り方」について共同研究をする

養正小学校では、初任者と初任者 2 年目の教員がおり、若い教員を日々の授業等を通して全教員で育てることで、他の中堅教員もこれまでに積み上げてきた実践をさらに積み上げ、教員全体の指導力は勿論のこと、人間性に磨きをかけてきています。

こうした「学校での研修の在り方」と「大学での教員養成の在り方」について、共同研究をすることも視野に入れてみるとよいのではないのでしょうか。

第6回三重大学教育学部外部評価委員報告

三重大学教育学部同窓会代表 山口悦子

同窓生として、大学がよき教育者の育成に向け様々な取り組みをされていることを知り、先輩たちが教壇に立つ日を楽しみにしております。

「教育は人なり」と言われますが、学生には、本を読み、多くの人と語り、共に感じ合える場面に出かけていくなど、魅力ある教師となるためにどんな努力をしているかが問われています。また、そのために大学はどのような支援ができるのかということも合わせて、教育について改めて考える機会をいただいたことを感謝しております。

卒業後33年が経過しますが、卒業当時を思い出しながら三重大学、そして卒業生たちに願うことを記述させていただきます。

1. 授業を参観して

現在、現場でかかえる教育の難しさを認識され、またそのことに対応できない指導力不足教員がいることを視野に入れた授業展開をされている講義を参観することができました。

現場では学級崩壊を起こす教師が増えつつあります。一つには、児童生徒に受け入れられない授業内容、一方的に自分の価値観を押しつけるような指導等、教師側の課題が指摘されています。教師の役割は知識の注入だけではなく、教科のおもしろさを味わわずところに大きな意味があると考えます。

大学での授業は専門的な内容の追究が他の領域・教科にも波及することをねらっておられると思いますが、学校現場の状況を把握したうえで、そこに送り出す教師を育てているという意識を強く持って指導していただくと、大学で学んだことが現場で生きるのではないかと思います。

多くの学生が受講しているにも関わらず、学生が積極的に参加している授業、少人数で討議したり実技をしたりしている授業など、児童生徒の思考の流れを想定した演習形式、受講者参加型の授業が展開されており、このような講座は現場での自信に繋がると感じました。

2. シラバス、卒業資格履修単位について

免許法の改正との関わりだと思いたすが、卒業資格履修単位の中でも特にコース専門単位数を増やす方向は考えられないでしょうか。

小学校現場では、理科実験のできない教師、ミシンも扱えない教師等、示範のできない教師の増加が問題となっています。そのことが子どもたちの学習意欲の低下につながり、「理科離れ」「算数離れ」等の問題を引き起こしているとも言われています。

小学校専門、教科教材研究等をさらに現場の授業を想定した内容にさせていただくことで実践に即したものとなると考えます。

知識はあっても授業はできないという教師を現場で見ることがあります。授業は深い教材研究により充実したものとなりますが、特に小学校専門、教科教材研究においては、知識的な内容を講義の中心とするのではなく、子どもたちの興味・関心を引き出すような指導法について学び、実践的な力をつけて学校現場で力を発揮できるような内容にさせていただければと思います。

いろいろな条件の中で難しいことだとは思いますが、学生が自分の不得意な分野・領域を受講できるような多様なシラバスを設定することは可能でしょうか。

「教育実習修了者」という枠を設けるなど、履修方法を工夫し、教育実習が生きるような取得方法は可能でしょうか。

3. 教員採用試験にむけて

採用率をあげるよう入学早期から採用にむけての支援・指導をしていただくことで三重大学教育学部としての特性が発揮されるのではないのでしょうか。

サラリーマン教師という言葉がありますが、現場でそのような教師がいることは悲しいことです。社会や子どもが変化してきている今日、教師としての使命感、学ぶ姿勢、情熱を持たない教師は失格とさえいわれます。これらは、指導教員との人間的なふれあい、ボランティアやクラブ、アルバイトなどの多様な体験から学ぶことが多く、机上では学べないことだと思えます。ぜひ、そのような体験ができるよう、そして、教師以前に人間として大切な心のコミュニケーション能力を身につけていただきたいと思います。

しかし、教師になるためには、まず教員採用試験をクリアしなければなりません。そのためのノウハウについて早期からご指導いただければと考えます。

以上、大学のますますの発展を願う卒業生として、大学の現状や困難性を理解せず申し上げましたことをお詫び申し上げます。